

# 一九五〇年代原爆の図展ポスターの発見

岡村幸宣

美術史家の青木茂と、二〇二〇年度より丸木美術館特任研究員を務める後藤秀聖の尽力によって、一九五〇年代の原爆の図展の貴重なポスター一七点が、神保町の古書市で相次いで発見された。

拙著『《原爆の図》全国巡回』（新宿書房、二〇一五年）には、上野誠（「平和を守る原爆展」新潟巡回、一九五二年）と新海覚雄（練馬「原爆展」、一九五三年頃）の手がけた二点のポスターの画像を収録していたが、これほどまとまって当時のポスターが現存していることが判明したのは大きな驚きであった。

ポスターの保存状態は良好であり、保管者の詳細や経緯は明らかにされていないものの、当時の巡回展の関係者が、明確な保存の意思をもって手もとに置いていたと推測される。

一九五〇年代の巡回展の盛り上がり伝える力強く豊かなイメージは極めて魅力的で、描き手や表現の多様さにも興味を惹かれる。また、今回のポスターの発見によって、新たな巡回展の情報も判明した。本稿は、こうした資料の整理、情報の更新・共有のために、まとめて報告するものである。

丸木位里と赤松俊子（のちの丸木俊）の共同制作による「原爆の図」は、一九五〇年二月に東京都美術館で開催された「第三回日

本アンデパンダン展」に第一部《幽霊》（発表時のタイトルは《八月六日》）が発表され、その後、八月に第二部《火》、第三部《水》が完成して「三部作完成記念展」（日本橋丸善画廊、銀座三越）が開催されたことを機に、全国巡回展の話がもちあがる。

同年一〇月に峠三吉が主宰する「われらの詩の会」が協力して広島市内・原爆ドーム南隣の五流荘（爆心地文化会館）で開催した「原爆之図三部作展覧会」が全国巡回の実質的なはじまりとして位置づけられるが、この時期の展覧会については、告知のチラシはいつか現存するものの、ポスターの存在は現時点で確認されていない。米軍を中心とする連合国軍占領下で、原爆被害の報道は厳しく規制されており、六月には朝鮮戦争がはじまって反戦運動も大々的にできなかつたという時期なので、充実した広報物が作られていなかったとしても、決して不思議ではない。

①今回発見されたポスターでもっとも古い資料は、一九五一年六月に岩手県盛岡市で開催された展覧会である。

原爆の圖三部作展

会期 一九五一年六月二〇日〜二二日

会場 川徳画廊（岩手県盛岡市）

主催 日本美術会

後援 岩手県教育委員会

入場料 一〇円

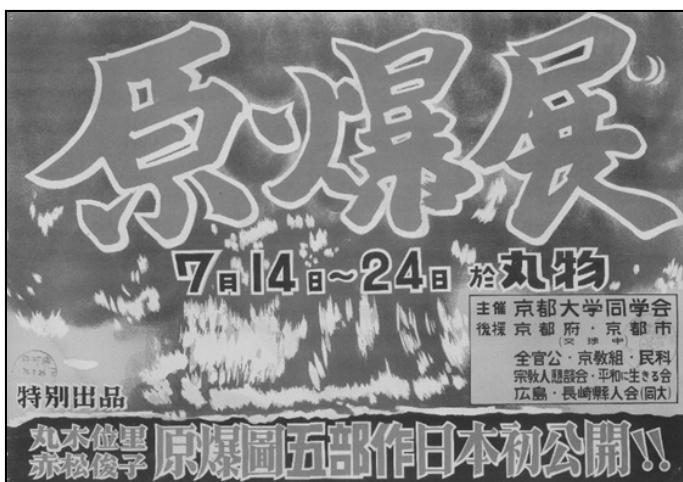
横たわる女性の裸体像は、位里の筆による「原爆の図」のためのデッサン」の一点。鮮やかな黄色の背景に、人体の肌が白く浮き出ている二色刷りの印刷で、極めてシンプルな構成は、位里と俊がみずから三部作を携えて旅をしていた最初期の状況をよく伝える例だろう。川徳画廊は、老舗百貨店の川徳デパート内にあった画廊。主催、後援などの情報は、丸木美術館が所蔵する「原爆の図三部作 展覧会記録」と一致する。



①1951年6月・盛岡展 52×35.5cm

「原爆の図」は早い段階で東北六県を巡回しており、岩手県は五県目の開催。この後、「原爆の図」は福島市での展覧会を経て、京都大学同学会の依頼を受けて京都市内へ向かった。

②一九五〇年七月に京都の丸物百貨店で開催された「原爆展」は、原爆を医・理・農・工・文・経済・法など各学部による総合



②1951年7月・京都展 35.5×52cm

的な角度から検証した画期的な総合展として知られ、その後各地の大学生が主催した「原爆展」に多大な影響を与えた。

### 原爆展

会期 一九五一年七月一四日～二四日

会場 丸物百貨店（京都府京都市）

主催 京都大学同学会

後援 京都市（交渉中）全官公・京教組・民科・宗教

人懇談会・平和に生きる会・広島・長崎県人会（同大）

特別出品 丸木位里・赤松俊子 原爆圖五部作日本初公開！

ポスターの背景に描かれているキノコ雲の作者は不明だが、位里や俊の絵ではなく、京都市の学生が描いたものかもしれない。特



③1951年8月・川崎展 54.5×38cm

別出品として原爆の図第四部《虹》、第五部《少女少女》が三部作とともに公開されたため、「五部作日本初公開!!」と大きな見出しが打たれている。その見出しと「原爆展」のタイトルは赤、その他の文字と画面下部の背景が青の三色刷り。画面左下には「26・7・25限」との日付の入った「許可済」（掲示の許可だろう）の印が残されている。四隅に画鋏穴の跡があり、実際に使用されたものだろう。

小畑哲雄著『占領下の「原爆展」——平和を追い求めた青春』（かもがわブックレット、一九九五年）など、このときの「原爆展」の回想や資料は多く残されているが、ポスターについての言及は未見である。

③京都市展の翌月には、神奈川県川崎市の百貨店・小美屋で「原爆の圖三部作展」が開催されている。

### 原爆の圖三部作展

会期 一九五一年八月二三日～三〇日

会場 小美屋三階（神奈川県川崎市）

主催 川崎市仏教会・川崎市教育委員会

後援 川崎商工会議所・川崎市労働・川崎地区労・鶴見地区労

責任者 勝山己代治

同時出品 西田氏制作 川崎戦災の図

盛岡展のポスターと酷似したうずくまる女性の裸体像（ただし左右反転している）は位里の筆によるもので、絵の背景と文字の一部が



④1951年9月・横浜展 34.5×53cm

浅葱色の二色刷り。従来資料では会期と会場のみ明らかになつてはいたが、今回の資料の発見によつて、主催・後援団体や責任者名などの詳細が判明した。注目すべきは「アメリカ力え渡る不朽の名作」との宣伝文句が記されていることで、この年はじめに誘いを断つて実現しなかつたと回想されている「原爆の図」の渡米計画が、この

時期において何らかのかたちで進行中であつた可能性が考えられる。同時出品の西田氏制作「川崎戦災の図」の詳細は不明だが、おそらく一九四五年四月一五日の川崎大空襲の被害を描いた作品が、「原爆の図」とともに展示されたのだろう。

④続いて同年九月に横浜市で開催された「横浜市従平和文化祭」にも「原爆の図」五部作が特別出品された。

横浜市従平和文化祭

会期 一九五一年九月一日～五日

会場 神奈川体育館（神奈川県横浜市）

主催 横浜市従

後援 横浜市労働組合連盟・神奈川県平和推進国民連盟

入場無料

緑青色と朱色を用いた三色刷りのポスターの背景に描かれた薄い線描画の作者は不明。人間の顔をモチーフにしたものだが、ひとつの目を左右の人物像が共有することでいくつもの顔が画面の外側へ連続していくイメージは、うごめく群像、あるいは大衆の連帯を想起させる。右下には26・8・28という日付で横浜市広告税免除の印が押されている。

この展覧会については、レッドパージによって労働運動ができず、文化運動でなければ総結集できないという状況下で、「平和文化祭」と銘打つて実際は「原爆展」をやつたという市従労組の教育文化部長による回想（桜井康信「変える闘い」、『市従人物二〇年史』、横浜市



⑥1952年4月・豊橋展 53×37cm



⑤1951年11月・札幌展 52×35.5cm

（従教宣部、一九六九年）が残されている。

⑤その後、「原爆の図」は俊の故郷の北海道へ渡った。一月に札幌市で開催された「原爆の図五部作展」のポスターは、原爆の図の代表的なイメージのひとつである第三部《水》の母子像を俊が墨で描きなおし、展覧会名を位里が記して、モノクロ単色刷りで製作したと推測される。当時の巡回展で作成されたポスターには、意外にも「原爆の図」そのものから転用したイメージが使われることが少なく、札幌展は希少な例と言えるだろう。

原爆の図五部作展

会期 一九五一年一月二〇日～二二日

会場 丸井今井百貨店四階、富貴堂二階（北海道札幌市）

主催 北海道大学文化団体連合会

京都の「原爆展」の影響を受けて北海道大学の学生たちが企画した巡回展（室蘭、旭川、秩父別、札幌、函館）の一環であったが、警察の監視が厳しく、実際には丸井今井は二一日までの開催で、北海道大学中央講堂に会場を移して二二日から二五日まで開催された。また、二二日には第二会場の書店・富貴堂に展示された「市民の声」が政令三二五号「占領目的疎外行為処罰令」違反として展覧会責任者が逮捕されるという事件も起きている。

⑥一九五二年四月二八日、サンフランシスコ条約の発効によって、沖縄や奄美など一部の地域を除いた日本は、連合国軍の占領から

解放された。ちょうどその時期に開催されたのが、愛知大学新聞部の主催による豊橋と名古屋の展覧会である。ポスターには、劫火に焼かれる母子を描いた俊の絵が使用されている。

丸木位里・赤松俊子全五部作 原爆展

会期 一九五二年四月二六日〜二九日

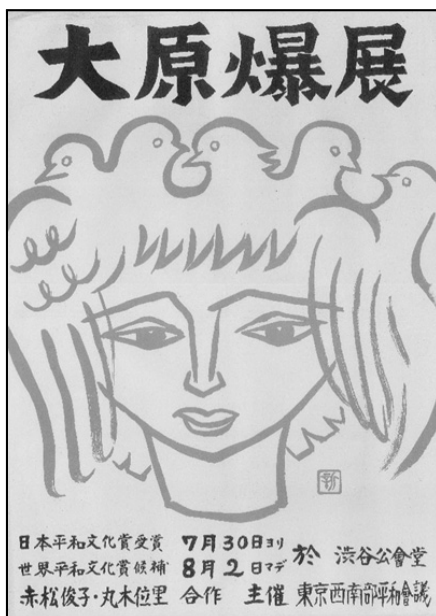
会場 豊橋中央公民館（愛知県豊橋市）

会期 一九五二年五月三日〜七日

会場 名古屋商工館ホール（愛知県名古屋市中区）

主催 愛知大学新聞部

この絵は、「原爆の図のためのデッサン」ではなく、ポスター用に描かれたものだろう。縦位置の構図を生かしつつ、原爆の悲劇を



⑦1952年7月・渋谷展 53×37cm

明快に伝える表現力は、絵本作家として数多くの仕事を残した俊らしい仕事である。大きな「原爆展」の見出しは京都展と同じく鮮やかな朱色で、二色刷りとなっている。

⑦一九五二年夏になると、東京都平和会議が主導し、東京都内で大規模な「原爆展」が組織された。その一環として開催された渋谷公会堂のポスターは、「わだつみのこえ」の作者として知られる彫刻家の本郷新による図案が使用された。

大原爆展

会期 一九五二年七月三〇日〜八月二日

会場 渋谷公会堂（東京都渋谷区）

主催 東京西南部平和会議

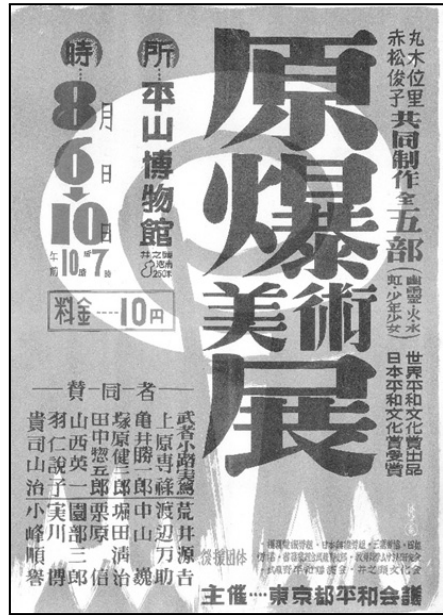
五羽の鳩を頭に冠した女性像の線描は朱色で二色刷り。「日本平和文化賞受賞」「世界平和文化賞候補」と記されているが、翌年一月には「原爆の図」が世界平和文化賞を受賞したという知らせが届くことになる。

⑧同年八月六日から一〇日まで、井の頭公園に近い、昆虫収集で知られる平山博物館で開催された「原爆美術展」も、東京都平和会議の主催であった。キノコ雲を単純化したデザインを用いたポスターは、赤、薄い水色を用いた三色刷り。

原爆美術展



⑨1952年8月・立川展 52×37cm



⑧1952年8月・武蔵野展 53×36.5cm

会期 一九五二年八月六日〜一〇日  
会場 平山博物館（東京都武蔵野市）

主催 東京都平和会議

後援 横河電機労組・日本無線労組・三鷹労協・田無労協・書籍組合武蔵野支部・教育科学ムサシノ研究会・武蔵野平和懇談会・井之頭文化会

賛同者 武者小路実篤・上原専祿・亀井勝一郎・塚原健二郎・田中惣五郎・山西英一・羽仁節子・貴司山治・荒井源吉・渡辺万助・中山巍・堀田清治・栗原信・園部三郎・実川博・小峰順譽

料金 一〇円

同年八月八日付『読売新聞』の記事には、主催が横河電機・日本無線労組・武蔵野教育科学研・田無労協と記されているが、巡回展の経緯を考えるとポスターの方が正確だろう。主催・後援団体に加えて、作家や大学教授、地元市長ら錚々たる顔ぶれの賛同者が詳細に記されている点においても、資料的価値の高いポスターである。

⑨同年八月一五日から一七日まで立川南口公会堂で開催された「原爆美術展」のポスターは、朱、紺、墨の三色の手刷り木版である点が大きな特徴だ。

原爆美術展  
会期 一九五二年八月一五日〜一七日  
会場 立川南口公会堂（東京都立川市）

主催 東京都平和会議  
後援 立川平和懇談会準備会

展覧会の責任者である東京都平和会議会員の岸清次は、「ポスターは現在有名な画家となつていられる佐藤多持画伯が原画を描き、木板の版木を作つて印刷して下さいました」（『小さなロウソクの灯のように』、けやき出版、一九八四年）と回想している。佐藤多持は東京都北多摩郡国分寺町（現国分寺市）の観音寺の息子に生まれ、岸とは幼馴染であった。

この展覧会を機に立川平和懇談会が結成され、感想文集や幻灯『基地立川』が製作されるが、ポスターの時点では「準備会」と記されている。

人類の惨禍!!再びくり返すな!!

9月14日  
朝9時 - 夜10時

川越會館

大人20 小人10

主催 株式会社 日刊埼玉  
後援 川越市・川越商工会議所

⑩1952年9月・川越展 51.5×38cm

会場となつた立川南口公会堂が、現在の柴中会公会堂（立川市柴崎町）であることも、二〇一七年八月の現地調査で判明した。

⑩ 今回のポスター発見によつて明らかになつた展覧会のひとつが、同年九月に川越会館で開催された「原爆展」であった。

原爆展

会期 一九五二年九月一日～一日

会場 川越会館（埼玉県川越市）

主催 株式会社日刊埼玉

後援 川越市・川越商工会議所

料金 大人二〇円 小人一〇円

「原爆展」の見出しは赤、背景は薄い灰色で、二色刷り。うずくまり、横たわる二人の女性を描いた絵の作者は不明だが、位里や俊の作ではない。

主催の『日刊埼玉』には、一九五二年九月五日、六日、一日付紙面に「原爆展」の社告が掲載されている。いずれも「本催については何等の思想や背景も意志もありません念の為」との一文が添えられたが、開幕後の一二日付紙面には「圧倒的人気！原爆展始る 悲惨な被害目前に 初日早くも五千人が参観」との見出しがあり、主催者の懸念を覆す観客の熱気が伝わってくる。

また、一日付紙面には、熊谷市でも「原爆展」の計画があると報じられている。当時巡回展に関わつた東京都立大学の学生・西岡洋の聞き取りでも、埼玉県内は浦和や川越のほか数力所を巡回



まで間が空いている。

原爆の図展

会期 一九五二年一月一六日～一九日

会場 佐世保市公会堂（長崎県佐世保市）

主催 佐世保市原爆図展実行委員会

参加団体 長崎県労働組合評議会・佐世保地区労働組合会議・

佐世保市遺族会・佐世保市連合婦人会・新婦人協議会・佐世

保市教組・佐世保市宗教連盟・佐世保高校職組・平和擁護委

員会・佐世保市教育課・各新聞社

入場料 一般二〇円 高校生一〇円 小中学生五円



⑬1953年4月・姫路展 70×51cm

第三部《水》の部分画像と会期・時間、会場の文字がオレンジ色で、二色刷り。「原爆の図」の部分をもままトリミングして転載した例は、現在発見されているポスターの中では佐世保展のみである。

展覧会の開催は一九五二年一月一九日付『長崎日日新聞』に報じられているものの、参加団体や慰霊祭の開催などの詳細な情報は、今回のポスターの発見で新たに判明した。

⑬ 一九五三年四月に姫路で開催された「原爆展」については、近年、姫路を拠点とする詩人集団「IOM同盟」の調査研究を行っている田口麻奈によって、開催予告や内容に関する揭示資料や、『はらからの叫び 姫路原爆展感想文集』（神戸大学姫路分校自治会／姫路平和を守る会準備会編、神戸大学文学書史料室蔵）の存在が明らかになっていた。

原爆展

会期 一九五三年四月二八日～三〇日

会場 姫路労働会館（兵庫県姫路市）

主催 神戸大学姫路分校

後援 姫路教職員組合・姫路工業大学

『IOM同盟主催街頭ハガキ展・反戦平和のための詩歌原稿展資料集』（田口麻奈編、非売限定二〇部、二〇二〇年）や「IOM同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証」（田口麻奈・逆井聡人、『都留文科大学大学

丸木・赤松兩重伯の  
**“原爆の図”展**  
 場所 防府市会議事堂  
 期間 自8月31日  
 至9月2日 未場歓迎  
 主催 防府市・防府地区連



⑭1953年8月・防府展 74×52cm

院紀要』第二四集、二〇二〇年)に収録された資料によると、「原爆展」の展示物は、「内容2」が「原爆の図(デッサン) 四〇枚、「内容3」が「ピカドン物語」、「内容4」が「原爆被害写真」と記されている。「ピカドン物語」とは、位里と俊の手がけた絵本『ピカドン』(ポツダム書店、一九五〇年)の複製画だろう。「内容1」は欠損しているが、ポスターの情報と照合すれば、「原爆の図全五部作」であることは間違いない。

「原爆展」および「原爆の図」の文字は赤、日時・場所・主催の文字は黄色、背景の煉瓦は茶色で四色刷り。広島を題材にした「原爆の図」の巡回展としては珍しく、長崎の浦上天主堂がモチーフになっている。この絵も丸木夫妻の作ではないだろう。ポスターの大きさはB2サイズとかなり大きい。

⑭ 同年七月に山口大学からはじまり、厚狭町(現山陽小野田市)、小郡町(現山口市)、小野田市、下関市、岩国市、防府市、宇部市と山口県内を巡回した展覧会には、夏休みに入った東京都立大学の学生も駆けつけて運営を手伝ったという証言が残されている。今回のポスターの発見によつて、これまで不明だった防府展の会期と会場、主催団体が判明した。

#### 原爆の図展

会期 一九五三年八月二日〜九月二日

会場 防府市会議事堂(山口県防府市)

主催 防府市・防府地区連

宣伝文のうち「丸木赤松両画伯の原爆の図」と、会期の目付が黄色、背景は濃緑色で印刷されている。中央の女性像は、一九五三年一〇月公開の日教組プロ製作映画『ひろしま』のメイインメージで、川の中で女学校の先生(月丘夢路)と生徒が抱き合う場面からの引用だろう。この絵もまた、丸木夫妻の筆によるものでない。ポスターの大きさはB2サイズ。

⑯ 一九五四年一月に「原爆の図」が世界(国際)平和文化賞を受賞したため、同年七月に開催された甲府展のポスターには、受賞を祝う宣伝文も記されている。

#### 原爆の図展

会期 一九五四年七月一日〜四日

# 原爆展

丸木位里 共同制作 原爆図  
赤松俊子

その他 絵画、版画、色紙、寫眞 陳列

4月2日(土)・23日(月) 午前9時・午後6時  
会場 横須賀市商工会議所講堂 市内大滝町  
会場整理費 大人20円、小供10円

主催 横須賀三浦原水爆禁止懇談会  
後援 横須賀市・横須賀市教育委員会・神奈川新聞社

松坂屋の牛肉 小型自動車  
オートバイ  
スクーター 車体保険の御用は、  
神陸協へ

組明命(御手迄)各店へ  
汐入・平坂上・坂本東区子・通子・鎌倉  
各店電話あり 神奈川県陸産事務所共済協同組合  
(横浜総社) 39入町2-1 TEL (04) 29784

⑬1956年4月・横須賀展 53×37cm

国際平和文化賞に輝く!

# 原爆の凶展

作-丸木位里、赤松俊子 4.5.6部



とき 7月 13日 ↓ 14日

233 岡島デパート

主催 山梨平和懇談会  
山梨青年婦人学生平和集実行委員会  
山梨県労働組合総連合会  
山梨県教職員組合

後援 山梨県・山梨県教育委員会・甲府市  
山梨美術協会・山梨造形美術会  
文化人・読売新聞甲府支店  
日本経済新聞甲府支店  
山梨時事新聞社・甲府放送局

⑭1954年7月・甲府展 53×37cm

会場 岡島デパート(山梨県甲府市)

主催 山梨平和懇談会・山梨青年婦人学生平和集会実行委員  
会・山梨県労働組合総連合会・山梨県教職員組合

後援 山梨県・山梨県教育委員会・甲府市・山梨美術協会・山  
梨造形美術会・文化人・読売新聞甲府支局・日本経済新聞甲  
府支局・山梨時事新聞社・甲府放送局

この展覧会の存在も、今回のポスターの発見によって明らかにな  
ったのだが、その後の調査で、一九五四年七月九日付『山梨日日  
新聞』に告知記事が掲載されていたことが判明した。

原爆の図が「4、5、6部」と記されているのは、初期三部作が  
俊の手によってヨーロッパへ渡り、海外を巡回しはじめていたことを  
示す。被爆者を思わせる顔の絵は、第五部『少年少女』右隻上部  
からの引用と思われるが、作者は俊ではないだろう。

⑯横須賀の「原爆展」は、一九五六年四月、「原爆の図」が十  
部作完成記念の世界巡回に旅立つ直前に開催された、壮行会のよ  
うな位置づけの展覧会である。従来は会場が不明だったが、ポスター  
の発見により、横須賀商工会議所であることが判明した。

原爆展  
会期 一九五六年四月二日〜三日  
会場 横須賀市商工会議所講堂(神奈川県横須賀市)  
主催 横須賀三浦原水爆禁止懇談会  
後援 横須賀市・横須賀市教育委員会・神奈川新聞社

会場整理費 大人二〇円 子供一〇円

「原爆展」の見出し、会期と会場、料金、広告などの文字が柿渋色、その他は青碧色の二色刷りのポスター。

⑩日時は空欄だが、主催団体と後援が「原爆展」と同じ「広島焼津原爆被災者を囲む懇談会」のB4サイズのポスターも発見されており（図柄と大きさは芝増上寺展と同一）、展覧会に合わせて企画された催しと考えられる。

以上の一七点のポスターは、いずれも「原爆の図」が出品された展覧会の告知でありながら、位里や俊が直接手がけたものは三分の一度の六〇七点に過ぎない。京都や横浜、横須賀など「原爆



⑩1956年4月・横須賀懇談会 37×26cm

の図」だけの展示ではない企画もあるとはいえ、別の描き手が「原爆の図」を描きなおしたり、まったく異なるイメージを創作あるいは転用したり、現在では考えられない大胆で自由な感覚が伝わってくる。

それは「原爆の図」の展覧会が、作者だけではなく、展覧会に携わった周囲の人びとの主体的な意欲を刺激していたことの表れか



⑪1967年9月・松坂屋展 38×53cm

もしれない。当時の印刷技術の可能性と限界の影響も大きいのだろうが、あの時代に人びとが共有していた「当事者性」は、こうした形で発露していたと考えることもできるのではないか。

⑧ 今回発見されたポスターの中には、一九六七年九月五日〜一日に銀座・松坂屋で開催された広島市・朝日新聞社主催の「原爆ドーム保存工事完成記念 ヒロシマ原爆展」も含まれていた。しかし、このポスターだけは十年ほど時代が新しくなることもあり、原爆ドームを上空から撮影したモノクロ写真が使用されている。現代的で端正なデザインである。しかし、一九五〇年代の手書きポスターから伝わる「熱」が確実に冷め、「過去」へ、そして「他者」へと遠ざかりつつある距離も、そこに感ずしてしまうのだ。

本稿は、ポーラ美術振興財団調査研究助成「丸木位里・俊の絵画作品「共同制作」に関する基礎的研究」の研究成果が含まれている。また資料調査に関しては、山梨県立図書館、川越市立中央図書館、熊谷市立熊谷図書館、本郷新記念札幌彫刻美術館に協力を頂いた。